ぐんまで頑張る職業人の熱意をレポート！

柴崎龍吾の課外授業

Vol.33

うすい学園代表取締役の柴崎龍吾が街に飛び出して、元気に働く人にインタビュー。
子どもたちのために、職業の多様性や働くことの意味を毎号レポートしていきます！

fmgunma 86.3

エフエム群馬にてインタビュー内容を放送中！ 毎週月曜 ワイド番組「ユウガチャ！」内 16:41頃～

うすい学園代表取締役　柴崎龍吾

大学在学中に劇団を主宰し、卒業後は放送作家として活動。1975年に個人塾「横川学習塾」を開校し、以降、うすい学園を展開。子育てや教育に関する著書多数、ラジオ番組出演中。

今月の職業人

群馬県蚕糸技術センター　所長　須関浩文さん

▲父親が養蚕をしていた関係から若い頃より興味を持ち、大学でも農業を修めた須関所長。「養蚕業を無くしたくない」との強い思いを持ち、高齢化が進む養蚕農家の技術継承や、群馬県の養蚕関連資産を活かす道を常に考えている

◀若い研究者や養蚕農家が育たない現状に悩みつつも、遺伝子組み換え技術によるイノベーションと、新しい産業の創出に意欲を燃やす

群馬県で始まる蚕業（さんぎょう）革命を夢見て

柴崎　今回は、遺伝子組み換えカイコの実用化研究や群馬県のオリジナル蚕品種の育成など、蚕糸に関わる研究や技術確立を担う群馬県蚕糸技術センターの須関浩文所長にお話を伺います。まず、現在の養蚕業の状況を教えてください。

須関　養蚕は、農産物のなかでも輸入自由化が早かった部門です。繭をつくる、糸をつくる、糸を染める、織る。養蚕だけでなくそれに関わる各段階、業態で、安価な輸入品が席巻し、生産者や産業を直撃しました。結果、群馬県では、昭和40年代はじめに7万戸以上あった養蚕農家が、平成29年には121戸にまで減少し、繭の生産量も激減しています。

柴崎　そんな状況を見て、群馬県の養蚕業をどうしたいと考えたのでしょうか。

須関　再生させたいと考えました。これはもちろん、私だけの思いではなく、諸先輩方や仲間の思いでもあります。どうしたら群馬県の養蚕業を復興できるか。答えのひとつが、群馬県オリジナルの蚕品種開発により、輸入品に対する差別化や高付加価値化を実現し、ブランド化することでした。当センターでは、糸の太さや色などが異なる8種類の品種を開発してきましたが、製品にする段階で染めたり織ったりすると、どうしてもオリジナリティが薄れてしまうのが悩みでした。

柴崎　そんななか、蚕の世界では技術のブレイクスルーが起きたのですね。

須関　2000年に茨城県つくば市の研究機関が、世界初となる蚕の遺伝子組み換え技術を開発しました。これにより、世界で唯一の糸を生み出すことも可能となる、まさにブレイクスルーでした。

柴崎　どのような糸が作れるのですか？

須関　現在、一番進んでいるのは、緑色蛍光タンパク質含有絹糸生産蚕という、青色LEDライトを当てると緑色に光って見える糸を作る蚕の研究です。県では昨年、この実用飼育に世界で初めて成功しました。

柴崎　面白い糸ですね。実用化・製品化に向けて動いているのでしょうか？

須関　実用化や製品化はまさしくこれからですね。実用飼育技術の確立で大量飼育が可能になり、生産量が増えれば、用途のアイデアも広がると考えています。現在はインテリアやアート、ファッション分野から素材として注目されています。

柴崎　今後のビジョンを教えて下さい。

須関　蚕というのは、タンパク質の製造能力にとても優れた生物です。そこに遺伝子組み換え技術を盛り込めば、検査薬や化粧品の原料を生み出すバイオテクノロジー産業として発展できる可能性を持っています。群馬県は高い技術の養蚕農家が多く、私たちのような研究機関もあります。この力を合わせ、今後は生糸だけでなく、バイオテクノロジーを支える拠点になれれば面白いと考えています。産業革命ではなく、蚕業革命。養蚕農家がしっかりと収入を得られ、若い担い手やベンチャー企業を呼び込む、新しくて格好いい養蚕業の創出。それを目指していきたいです。

柴崎　養蚕業や製糸業で栄えた群馬県だからこそ、新しいイノベーションを起こせるのだと語る須関所長。思いを話す目は真剣であり、生きいきしていたのが印象的でした。それではまた次回！

USUI
高崎・前橋・伊勢崎・安中・太田周辺の学習塾。
中高一貫教育や幼児～大学受験生までの一貫教育に強い地域密着型学習塾「うすい学園」
☎027-310-1919　http://www.usuigakuen.co.jp/
うすい学園公式　Facebookはじめました。「柴崎龍吾の課外授業」の過去記事もUPしています。ぜひご覧ください。